

千葉ゆかいの文学を巡る

今回は、伊藤左千夫・高村光太郎・芥川龍之介など、文豪たちゆかりの地を巡りました。

- 日 時 平成 20 年 9 月 27 日 (土)
午前 9 時から午後 4 時 30 分
(JR 大網駅集合——バス移動——JR 大網駅経由千葉駅解散)
- 場 所 山武市内にある伊藤左千夫の生家 (県指定史跡) と山武市歴史民俗資料館、および一宮町にある一宮館・芥川荘 (国登録有形文化財) など。
- 日 程 9:00 JR 大網駅 集合
↓バス移動 (山武市へ)
10:00—11:30 ①山武市歴史民俗資料館 (展示見学)
②伊藤左千夫の生家
③伊藤左千夫記念公園
11:30—12:30 解説+見学後、昼食
↓バス移動 (九十九里町へ)
13:00—14:00 ④智恵子抄詩碑 (千鳥と遊ぶ智恵子)
(国民宿舎サンライズ九十九里)
解説+見学
↓バス移動 (一宮町へ)
14:30—16:00 ⑤一宮館・芥川荘
解説+見学
↓バス移動
16:30 JR 大網駅 解散
↓バス移動
17:30 JR 千葉駅 解散

【見学のポイント】

- ①山武市歴史民俗資料館は平成 20 年 5 月 3 日にリニューアルオープン。伊藤左千夫関連の展示がしてあります。
- ②伊藤左千夫の生家は県指定史跡。資料館に隣接し、左千夫が愛用した唯真

閣と称する茶室を併設してあります。

- ③伊藤左千夫の功績をたたえて造られた記念公園。資料館からここからまでは、野菊路とよばれる散歩道を通して徒歩約3分。
- ④智恵子抄詩碑は、詩人で彫刻家でもあった高村光太郎の妻、智恵子が昭和9年に当地で療養していたことを記念に建てたもの。『智恵子抄』などに反映されています。
- ⑤芥川荘は国の登録有形文化財。ホテルー宮館の離れで、恋愛で悩んだ龍之介がいくどとなく過ごしたところ。のちに妻となった塚本文に、求婚の手紙をここで書きしたためたことは有名。『海のほとり』などに反映されています。

●大網駅からバスはスタート。本日は講師に中谷順子(千葉県詩人クラブ)先生をお迎えし、終日お付き合い願いましたが、随時、ご解説をいただき、たいへん勉強になりました。そこで、まずは行きの中で伊藤左千夫について知識を深めます…。

○山武市歴史民俗資料館

昭和47年(1972)伊藤左千夫の生家に隣接して設置。当初は成東町歴史民俗資料館でしたが、平成18年の町村合併により山武市歴史民俗資料館と改称し、平成20年5月3日にリニューアルオープン。平成20年9月20日(土)より平成21年3月29日(日)まで「伊藤左千夫の作品」展Ⅱを開催中。なお、資料館前の「野菊路」より300メートルほど先には左千夫記念公園があります。



○伊藤左千夫の生家

山武市殿台393。築約220年となる母屋のほか、付属舎として茶室、土蔵があります。昭和25年(1950)11月千葉県指定史跡。敷地内には元からあった樹木のほか、短歌雑誌「阿羅々木」や「馬酔木」、小説「野菊の墓」にちなみ、イチイ(アララギ)やアシビ、ヨメナ(野菊)などもあります。特に、茶室は「唯真閣」と呼ばれ、左千夫自らが設計したもので、東京・茅場町の自邸にあったのを後年移築しました。左千夫は茶道にも通じていて、子規から「茶博士」と呼ばれたほどでした。



* 伊藤左千夫(いとう・さちお)元治元年(1864)8月～大正2年(1913)7月。歌人、小説家。本名は幸次

郎。上総国武射郡殿台村(現・千葉県山武市)の農家出身で、明治法律学校(現・明治大学)を中退。明治 31 年(1898)に新聞「日本」に『非新自讃歌論』を発表。『歌よみに与ふる書』に感化され、正岡子規に師事。子規の没後、根岸短歌会系歌人をまとめ、短歌雑誌『馬酔木』『アララギ』の中心となって、斎藤茂吉、土屋文明などを育成した。また、明治 38 年(1905)には、子規の写生文の影響を受けた小説『野菊の墓』を『ホトギス』に発表、夏目漱石に評価される。代表作に『隣の嫁』『春の潮』などがある。

○左千夫記念公園

伊藤左千夫の功績をたたえて造られた記念公園。中央には『野菊の墓』の政夫と民子の像が建っています。また、左千夫と同時期に活躍したアララギ派八歌人の歌碑などもあります。資料館からここからまでは、野菊路とよばれる散歩道を通って徒歩約 3 分。



●資料館・生家等での見学を終えると、次は一路、九十九里へ。好天にも恵まれ、景色は上々でした。海のかなたの水平線もくっきりと見えます。さて、今度は高村光太郎のお勉強・・・。

○智恵子抄詩碑(千鳥と遊ぶ智恵子)

精神を病んだ高村光太郎の妻・智恵子は、昭和 9 年(1934)5 月から 12 月まで九十九里浜の真亀海岸にある妹夫婦の家で静養しました。その際の様子は『九十九里浜の初夏』などに記載されています。この詩碑は、のちの昭和 36 年(1961)7 月、草野心平をはじめ、地元の白寿俳句会が中心となって建立したものです。碑文は、光太郎のペン書き草稿を 4 倍に拡大して彫ったといわれています。昭和 45 年(1970)3 月、一宮町・九十九里町片貝間に通称、波乗り道路(九十九里有料道路)の建設によって現在地に移設されました。



* 高村光太郎(たかむら・こうたろう)明治 16 年(1883)3 月～昭和 31 年(1956)4 月。彫刻家・評論家・詩人。東京都出身。本名は光太郎と書いて「みつたろう」。

* 高村智恵子(たかむら・ちえこ)明治 19 年(1886)年 5 月～昭和 13 年(1938)10 月。洋画家。旧姓は長沼、光太郎の妻。彼女の死後、夫が出版した詩集『智恵子抄』は有名。長沼家は清酒「花霞」を醸造する酒造家で、資産家でもあった。

●続いてバスは一宮へ。お次は芥川龍之介関連です。中谷先生からは、文豪たちの人となりや性格など、いろいろなエピソードをまじえてお話いただいたので、たいへん興味がわいてきます…。

○一宮館・芥川荘

芥川荘は旅館・一宮館の離れ客舎で、龍之介が利用したことから、いつしかそう呼ばれるようになりました。平成13年(2001)10月国登録有形文化財(建造物)。東大を卒業した年「芋粥」を書き上げた龍之介は、友人・久米正雄と大正5年(1916)8月17日から9月2日まで、当所でひと夏を過ごしました。滞在中は、師の漱石に当地での暮らしぶりを綴ったり、やがて妻となる塚本文に愛をうちあけた長文の求婚の手紙を書いています。のち、二人は2年ほどの婚約期間を経て大正7年(1918)2月に結婚。龍之介26歳、文18歳でした。



* 芥川龍之介(あくたがわ・りゅうのすけ)明治25年(1892)3月～昭和2年(1927)7月。小説家。

* 芥川文(あくたがわ・ふみ)明治33年(1900)7月～昭和43年(1968)9月。芥川龍之介の妻。旧姓は塚本。俳優・芥川比呂志(長男)、作曲家・芥川也寸志(三男)らの母。

●こうして、見学は無事終了。たいへん有意義な1日を過ごすことができました。参加者の皆様、お疲れ様でした。そして、ご協力ありがとうございました。それにしても、文庫本でも買って読んでみたくなる気分になりますね…。

【コラム】龍之介もこよなく愛した？九十九煎餅

九十九煎餅と書いて「つくもせんべい」と読みます。九十九煎餅は一宮の名物と謳われ、角八本店(一宮町一宮、明治39年創業)が大正期より製造してきました。いわば瓦煎餅風の菓子で、卵やバター、小麦粉・砂糖などを原材料としています。この商品誕生の契機としては、大正期頃から当地が避暑地・別荘地、リゾート地化しはじめたことがあげられ



ます。当時、平沼騏一郎・斎藤實・大河内正敏・中村進午・金田鬼一など、多くの政治家や軍人、学者・文人がこの地に別荘を構えるようになり、芥川龍之介や久米正雄らもよく静養に訪れました。特に、一宮町老女子は別荘地として格好の地で、いわゆる文士村化しつつもありました。なかでも志田鉦太郎は、それを積極的に推し進め、併せて町の発展にも力を貸しましたが、そもそも志田が同僚の粟津清亮と相談し、この煎餅の製造を角八本店に勧めたことから、九十九煎餅が誕生したのです。この商品はこうした社会背景のなかから育まれたもので、今日でいう、町起こしの目玉商品

に相当します。煎餅には、梶田半古の画と安積良斎の漢詩とを型焼きするといったほどのこだわりようで、当時の時代性が窺えます。

旅館・一宮館では、今でも離れに小舎を残しています。ここは、かつて芥川龍之介がひと夏を過ごしたところで、それに端を発し、芥川荘(国登録有形文化財)と呼ばれるようになりました。龍之介が、ここでのちに妻となった塚本文(つかもと・ふみ)に、求婚の手紙をしたためたことは有名です。一宮館では、客のお茶請けには九十九煎餅を出してきたそうで、だとすると、かの龍之介もこの煎餅をほおぼりながら、恋文を書いていたのかもしれませんが。

【参考】

- ・平沼騏一郎(ひらぬま・きいちろう)、慶応3年(1867)～昭和27年(1952)第35代内閣総理大臣。男爵、法学博士。
- ・齋藤實(さいとう・まこと)安政5年(1858)～昭和11年(1936)海軍軍人、政治家。第30代内閣総理大臣。
- ・大河内正敏(おおこうち・まさとし)、明治9年(1876)～昭和27年(1952)物理学者、実業家。理化学研究所の3代目所長、貴族院議員。
- ・中村進午(なかむら・しんご)、明治3年(1870)～昭和14年(1939)国際法学者。
- ・金田鬼一(かねだ・きいち)明治19年(1886)～昭和38年(1963)翻訳家。
- ・志田鉦太郎(しだ・こうたろう)慶応4年(1868)～昭和26年(1951)法学者。明治大学商学部設置に尽力し、のち千葉県立一宮商業高等学校の初代校長にも就任(大正14年から昭和11年まで)。昭和13年(1938)明治大学総長。日本保険学会を創立。
- ・粟津清亮(あわつ・きよすけ)(1871～1959年)。保険学者。
- ・梶田半古(かじた・はんこ)明治3年(1870)～大正6年(1917)日本画家。本名は錠次郎、別号は玉洲。日本青年絵画協会を組織。のち日本美術院に入る。風俗画を得意とし、小杉天外・尾崎紅葉らの雑誌や新聞の挿絵で活躍。
- ・安積良斎(あさか・ごんさい)寛政2年(1791)～文久元年(1860)儒学者。近代日本を導く多くの人材を育てた良斎の功績は大きい。門下生には吉田松陰・高杉晋作・岩崎弥太郎・小栗上野介・秋月悌次郎ら、幕末から明治維新にかけて活躍した偉人が並ぶ。